

# 山崎郷土叢

No. 92

10.9.5

兵庫県宍粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話 62-2000

## 山崎町の変遷と今後 (追補)

宇野正碓

前の91号までに四回にわたって標題の点についてのべたが、執筆中にも本町通りを中心とする商店街の舗道の改装、山崎〜南光線と山崎〜新宮線の交差点の拡幅改造等いろいろの変化が見られるので特に城下地区を中心に追補をすることとした。

一、山崎〜新宮線沿線。城下平野の中央部を南北に縦貫する道路は従来の農道を改修し幅員約4mの直線道とした。これは明治二一年の完成で、明治四一年には旧藩士遠藤巨氏が武家屋敷と城下村を結ぶ新道路の建設を始めたので直線道路の完成を見た(城下小学百年誌)。こうして完成した道路沿いには農家と少しづつ住宅・小売店・工場が点在するに過ぎず一挙に沿道が活性化することもなかった。

その後喫茶店・軽食・パチンコ・事業所等が建ち、電機器具量販店の進出も有り、さらに「咲ランドジャスコ新山崎店」の城下地

### 目次

① 山崎町の変遷と今後 (追補)	宇野正碓……	1
② 松平家宍粟日記 (延宝年間)	堀口春夫……	3
③ 宍粟郡の神社	久保寅夫……	6
④ 江戸時代の宍粟郡梵鐘集成	片山昭悟……	16
⑤ 長水城略史	深川定義……	21
⑥ 歴史の足跡吉野を訪ねて	垣口正信……	25
⑦ 事務局だより……		28

区移転があつてやや活気を帯びて来た。活気を決定付けたのは、従来中国自動車道利用する山崎〜新宮線の車輛は一旦、山崎町の市街地に入ってインターに連絡する不便に耐えていたが、今回、山崎〜新宮線の車輛が直接インターに入ることのできる山崎〜新宮線支線が完成したことにあると考えられる。この山崎〜新宮支線に「ホームセンターナンバ山崎店」が開店、《靴のヒラキ、ナカドラッグ、ニチデン、たいこ弁当各山崎店》がそれに続いて一

挙に賑わいを呈するようになった。その影響からか地元の小売店が「セイコーマートふくだ」と新形式の店舗となった（城下小学校横のフジモトマートはすでにスーパー形式であった）。つぎに新旧の量販店と、その他新設の医院なども含めてその位置関係を下図に示す。

二、29号線と南光線沿線

○29号線と山田町筋の交差点にホテル・サフランがオープンし、宿泊客の利用は勿論、結婚式場・宴会場・会議場にも使用可能な五階建てのビルが建設されて山崎町の面目を一新した。

○コンビニ「サンクス」がホテル・サフランに隣接して開店した。これは隣あつた従来型の八百屋が「サンクス」というコンビニに改変したものである。

○同じくコンビニが神姫バス山崎停留所横に開業、29号沿線の中三津のコンビニ「ポプラ」の兄弟店ということになる。

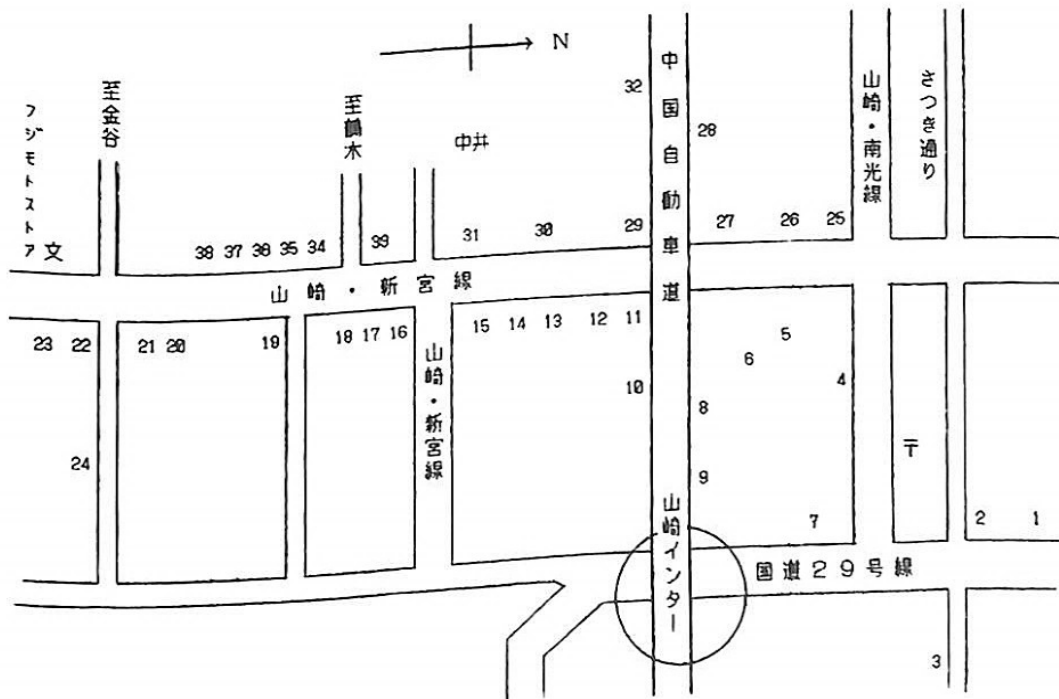
○ホテル・サフランの東方約100mに文具店が、町の中央商店街から移転してオフィス用電子機器店となっている。

三、郊外地の宅地造成。以前旧河東村の神谷地区・岸田地区、旧神野村の田井地区の住宅増加について触れたが、これらの地区は本年になって更に宅地造成が、神谷元公民館下、岸田高瀬・松ノ本、田井下川原にすすめられている。

城下地区量販店等（県道 山崎・新宮線）

- |    |                |
|----|----------------|
| 1  | ホテル・サフラン       |
| 2  | コンビニ・サンクス      |
| 3  | イトーオフィスサービス    |
| 4  | コンビニ・ポプラ       |
| 5  | 咲ランドジャスコ新山崎店   |
| 6  | サンスイミングスクール    |
| 7  | カフェレストラン・ダヴィンチ |
| 8  | ギフトショップ・ロワール内  |
| 9  | 眼科医院横川伊藤       |
| 10 | 宅配専門タカイファミリー   |
| 11 | パチンコしんき        |
| 12 | 播州電業           |
| 13 | カラオケ・ハバナクラブ    |
| 14 | 和光電気山崎店        |
| 15 | ナカ・ドラッグ山崎店     |
| 16 | ホームセンターナンバ山崎店  |
| 17 | パチンコ・格蘭アプリ     |
| 18 | ミスノ・ランバード      |
| 19 | たいこ弁当山崎一号店     |
| 20 | J A城下店         |
| 21 | オール仏壇          |
| 22 | 喫茶・レストラン       |
| 23 | ブッタン           |
| 24 | 旅館さつき荘         |
| 25 | 岡野外科医院         |
| 26 | 贈物広場セノラ        |
| 27 | ブックランド・ヤスイ     |
| 28 | メモリアルホール法倫会館   |
| 29 | コープこうべ六粟出張所    |
| 30 | 喫茶美容ボチの家 外     |
| 31 | セイコーマートふくだ     |
| 32 | 郡民病院駐車場        |
| 33 | 山陽自動車運送・喫茶旅館等  |
| 34 | ニチテン山崎店        |
| 35 | 靴のヒラキ山崎店       |
| 36 | 福井製作所          |
| 37 | 太陽石油           |
| 38 | 長田産業           |

その他 コンビニ・サンクス山崎もう一店出店予定中



# 松平家実粟日記 (延宝年間) (四)

堀口 春夫

前号に引き続き実粟日記を紹介します。

廿七日 天気吉 (延宝五年正月)

一、御印判九ツ内二ツ大小金、六角此目拾一匁五分、右御印判共松井七右衛門改打わる大井庄十郎殿より去年絵画に御書せ下され候様にと豊前様御無心仰せなされ候へ共、絵書相煩ひ居り申すに付、仰せなされず候由にて探幽写し二巻並に唐紙十枚参らせ候、絵二巻は下谷様御つう殿へ差し上げ、唐紙は井上藤八に相渡す。

一、池田帯刀殿花入に切り進め候へと仰せなされ、大竹五尺程去年御越し候へ共、返上致し候由にて参らせ候。其段水野三郎兵衛に申し昨日予州様へ上げ申し候、(松井七右衛門諱ハ良直、河樂卜号ス、初メ恒元公ニ仕エ後光政公ニ召シ出サレ国学ノ副監ニ任ゼラル) 中略

晦日 天気吉

一、三郎兵衛方より申し来たり候は御支配帳と在り候儀を切米帳と自今以後仕り候様にと仰せ下され候。

二月朔日 小雨降

一、水野三郎兵衛来り御書出し一通、先日申し付け候さる物成残米の分其れぞれ給人共へ相渡し候様に申し付くべく候。

一、当春の借米帳面の奥のメ可用印判候間其れぞれに遣し候切手

当地にては瀧本弥兵衛一判、実粟に於いては瀧本弥兵衛、村田九兵衛兩人の判形仕る可く相渡し候。

一、未追新奉公人の事代官共の手前吟味を遂げ抱え似合わ敷役申し付くべく候也。

丁巳正月廿九日 侍従 (網政公)

瀧本弥兵衛殿

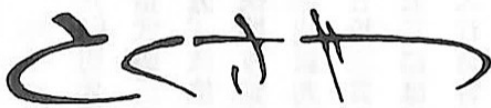
一、実粟より参り候笙伊予守様へ差し上げ候へば色付にて御意に参らず、白笙御所望の由御意に付弥兵衛笙差上候て替りに実粟より参り候笙と御かえ下され候。

二月十一日 天气好 風少し吹

一、加藤九左衛門昨夜罷り帰り候由にて宮野頼母、大口十右衛門方よりの書状来る、御棺直に和意谷へ入らせらるるに付、姫路の脇青山と申す所へ何れも実粟より罷り出で御供す、是より何も江戸よりの御供罷り帰り、大口十右衛門は和意谷へ直に御供。

正月廿九日に和意谷に

## 呉服とジュエリー



本店 本町(さつき通り) 62-1680

咲ランド3F呉服のとくさや 63-0568  
 // 2Fジュエリーのとくさや 63-0557

て御納り、備後守様御墓所左の方少し下りにて御墓所。伊予守様御意の為加藤九左衛門七ツ半前に来る。御意には先月廿九日に和意谷にて天気好御納り、道中も別条無く御着御大慶に思召され候由御意成され候。新兵衛宇右衛門呼び寄せ和意谷迄供御座なされ候。御納りの様子物語仕り候へと御意の由にて両人の物語九左衛門申され候。

十二日 天気吉

一、隅田川へ成りなざるに付、家中の者共外へ一円出申さず候様申し渡され候。

十三日 天気吉

一、当月二日の町飛脚の状十二日相達し、予州様へ差し上げ候、意趣は物頭衆御用人衆申され候は今度江戸御入用の銀、給人衆より御歩行衆迄御切米拾六俵以上の衆中として米指上げるべく申す由申し来る。江戸定詰も同事に申され惣高の割此如し。

一、知行高壹万三千百五拾石、給人衆七拾五人、

外科・内科

# 山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL②0036

江戸定詰共、内式百石ハ俊庵道英分、此上ケ米六百五拾七石五斗、高百石に付五石宛、此銀三拾九貫四百五拾目、石に付六拾目宛。

一、米高式千六百九拾式石九斗、無足人御切米御扶持方共、但し拾六俵取以上の分、此上ケ米四百五拾式俵三斗、但し米高拾式石に一石宛、此の銀拾参貫百式拾六匁、式俵に付五拾八匁宛。

一、米高百九拾石江戸無足人御切米御扶持方共此上ケ米三拾式俵壹斗六升、但し米高拾式石に壹石宛、此銀九百三十七匁六分、但し式俵に付五拾八匁宛、三口銀合五拾三貫五百拾三匁六分。

一、水野三郎兵衛申し候、御意(網政公)には村田九兵衛方よりの書付御覽遊ばされ候、此節の儀心入れ奇特に思召し御感成され候、此旨何もへ申し聞かすべきの由、委細は弥兵衛に申し聞かせ候様に御意候、御意成され候は何も志の程御やぶり成され候も如何に思召し候、然とも当節銀子手つかえもこれ無く万一手つかえ候はば五、三十貫目の儀は是に幸せなされ御座の儀に候間御借り成さるべく候、然る上は御受納なされ間敷候間弥兵衛によく申せとの御意に候。

十四日 天気好

一、昨日予州様御意の趣今朝江戸衆中へ申し渡す。六粟へも今晚町飛脚に申し遣す。

十五日 雨降

一、水野三郎兵衛申し来り候は六粟より申し参り候切手の儀伺い候えばいかにも御判遊さるべく候。備前にて池田大学殿(備前

国老) 日置猪右衛門殿(同上) 切手に添御判遊ばさるべく哉、

当地にて日置左衛門殿(猪右衛門の子息) 切手に御添判成さるべき哉望み次第に遊ばさるべき由。只今の節何かと御判等も遊ばされ候儀、御心好も思召されず、同じくは御当地にて御借り成さるべくとの御意候得共、最早六粟にて相調候様子候間唯今在所へ申し遣し、何とも此方の切手にて埒明け候様に仕り度候由申し上げ候

十六日 天気能 北風吹

一、市正様御出、奥へ御通り、津田(永忠)へも御逢い。

十七日 天気吉

一、窺い候えば当暮の御物成(租税即千年貢ノコト)の内銀子二貫御奥様へ今晚にも錦織新兵衛持参申し候様に申し渡すべく候由、御遣い用にも候半と思召し伊予様より弥兵衛に仰せ付けなれ候通り宜しく申すべき旨此の通り新兵衛に申し渡す。

十八日 天気吉

一、水野三郎兵衛来る、備後守様遊ばし候八代集おつう様御望みの由、上候へと申し聞かざる、東禅寺にて御法事の節下宿秋主座へ銀子三枚遣され候、是は大勢に寝道具共かし、夫に就き遣され候。

一、次郎丸様へ御家中の者御礼年頭の通りに銀子上る。

一、次郎丸様へ惣代の為備前へ罷り越し御目見得太刀にて御礼申し上げ候。

一、御跡目仰せ出でなされ候はば少将様、伊予様両脚前様へ物頭

以上御着指上る事。

廿日 天気吉 風吹

一、下谷様御脈今朝初て理安伺う。秋主座へ銀子三枚遣わし候様に水野三郎兵衛申され、即ち遣わし候、伊予様入らせられ下谷様御つう様へ御対面、予州様御意成され候は御不食御心元無く思召し候、随分只今の内御養生專にて御座候、今少し重らせられ候ては何を成さるべき様もこれ無く候、舟にても陸にても深川の御下屋敷辺りへ御出遊し候様にと仰せられ候、弥兵衛差し図に成され、御思召され候て御養生遊され候様にと御意候。大井新右衛門殿御出所様に御対面。

一、予州様新右衛門殿へ津田(永忠)御目見え。下谷様おつう殿今日より表馬場へ御出なされ候。

廿一日 曇、少雨降

一、裏の御門へ下谷様、御通様入なされ、往来共御歩行にて

廿二日 日暮て雨降

一、船にて下谷様、左京様、おつう様御出、深川へ御着、八幡へ御参詣、其より御帰り御舟深川伊予様御下屋敷へ御寄、夕御膳御上り、日暮れに御帰り。四間の舟五人かこ式拾目三間の舟三人かこ拾匁、とうあみ舟打手共に拾匁、弥兵衛彦兵衛御召し船に乗り御供船新兵衛、源助、伊右衛門、理安、浅井六右衛門、又市、御小姓一人、鐘持、御草履取、伊予様の御屋敷守り一切、小人六人に銭一貫文遣わされ候。

廿三日 雨少降

一、水野三郎兵衛より借用の金子貳百匁今日返進、谷口孫左衛門持参。

一、廿一日よりごぜ始て参、今日帰る。銀一枚遣され候。

廿四日 天気能

一、御兩人様裏門へ御出。御つう様年寄今日参る。ごぜ三人今晚より参る。

廿五日 天気能

一、御船にて御出、金龍山(待乳山)へ御寄。隅田川へ御入、重物ども御覧、御冷食御さげ重召し上げられ候、住持つへ一步二切遣さる。それより舟場迄御ひろい御舟に召し御帰り、浅草の渡し場より御上り、亀井土天神へ御入、御帰り御舟に召し、御高

屋の下にておかかり、夕御膳上り夜に入御帰り、御供弥兵衛、理安、新兵衛、猪右衛門、御膳方孫兵衛、又五郎、孫九郎、加左衛門、弥吉、孫十郎、孫六、源五郎、勘太夫、藤助、四間舟一艘、とうあみ舟一艘、平だ二艘。

廿六日 天気好少曇り

一、御遺物に上り(將軍家綱公へ)の直政の御刀御拵出来、本阿弥権三郎方へ荒木善六参り請け取り帰る。今日四十九に付村瀬三右衛門、佐々宇右衛門東禅寺へ御焼香に参る

## 大栗郡内の神社

久保寅夫

森モリと社ヤシロ

社とは何か、現在ではどここのお社、お宮、何村の神社、社宮、神社をいずれも同じ状態を示して、区別することもなく用いられて、一般には神社でこれらを代表させている。

越中の莊園図の記載によると、櫛田神、浅井神、鹿臺社、土神、所神などがあって、神社という表現はない。これらからみて当時は社ヤシロというのが一般的の呼称で神社とは呼ばなかった。又一方では社を「モリ」とよむ例がみられる。

「神奈備の伊波瀬の社の喚子鳥いたくな鳴きそ恋益さる」(万葉集一四一九番)に、社がモリとみられる。更に神社についても、「ゆう懸けて齋いうこの神社モリこえぬべく思ほゆるかと恋の繁きに」と神社をモリとよまれている。現在の民間伝承のうちにも、とくに西日本に多くのモリを聖地とする、信仰の存在が知られている。

島根県の西石見地方のそれは森神と呼ばれ、多くは屋敷に続く裏山に位置して、森のうちのタブ、マキ、スギ、カシ、テンジクカツラなどの常緑樹のうち一本をモリ木とし、モリ木に注連を張つて、根元に幣串をさして祀っている。

西日本の各地に多くみられる森や樹の聖地とする習俗は、森全体を聖なるものとする地が辺境にみられることに注目するならば、森全体からそのうちの一本の樹へと信仰の対象が移ってきたものとすることができる。(日本民俗文化大系一之巻④神と仏参照)

山崎町内の神社 (其の一)

旧町村名	神社名	所在	祭神	系譜	備考
山崎町	総道神社	山田町	猿田彦神	国ツ神	道を導く神、庚申祭の神
	恵美酒神社	北魚町	少彦名神 猿田彦神 武甕神	神産巢日神の裔 国ツ神 大国主神の子孫	医薬の神 道を導く神、庚申祭の神 軍神
	八幡神社	門前東垣内	應神天皇 仲哀天皇 神功皇后 大年神	須佐之男命の子孫	武の神とされているが 穀物の神
	須賀神社	横須	須佐之男命	伊耶那岐命の子	病氣全快の神
	稲垣神社	中広瀬	宇氣母智命	伊耶那岐命の子	食物の神
	大歳神社	上寺	大年神 火之加具土神 上筒之男命	須佐之男命の子 伊耶那岐命の子 伊耶那岐命の子	田畑の神 火の神 航海の神、港の神
	神明神社	今宿	天照大神	伊耶那岐命の子	病氣全快の神
	須賀神社	加生	須佐之男命 多紀理毘賣命	大国主命の配偶者	
	埴尾神社	元山崎東源ヶ谷	須佐之男命 宇迦能魂命	須佐之男命の子	農業の神

城下村

雨祈神社

千本屋宮ノ段

高麗神  
ホムスビノカミ  
火産靈神

武速須佐之男命

貞津比古命

貞津比賣命

須佐之男命の子

々

穀物の神

々

病氣全快の神

火の神

雨の神

孤山神社

下広瀬上垣内

火産靈神

火の神

葦原神社

段字山根

木花咲屋姫命  
フナハサカヤヒメノミコト

鶴木神社

段藪ノ内

天津彦瀲能命  
アマツヒコニギノミコト  
倉稻魂命  
ウツリノミタマノミコト  
大物主神

天照大神の孫

須佐之男命の子

須佐之男命の子

大国主命の別名

農業の神

田中神社

天照大神

稲垣神社

野

倉稻魂神

須佐之男命

農業の神

天神神社

春安鎌谷

菅原道真

鹿島神社

中比地堀名垣内

磐長比賣命  
ノワカガヒメノミコト

大山津見命の子

寿命長久祈願の子

建速神社

下比地東垣内

須佐之男命

岩田神社

上比地森ノ上

磐筒之男命  
イワツツノオノミコト

伊耶那岐命の子

岩石の神



戸原村

武速神社

下宇原

須佐之男命

磐筒之女命  
イワツツノメノミコト  
磐別神  
イワサクノカミ  
経津主神  
フナズシノミコト  
大年神  
オホトシノミコト  
瀬織津姬命  
セオリシヒノミコト

磐筒之男命配偶者  
伊耶那岐命の子

〃  
岩石の神

所の神

川戸村

岩田神社

宇原小路口

磐筒之男命  
磐筒之女神

〃  
岩石の神

河東村

春日神社

高所

磐筒之男命  
磐筒之女神  
伊耶那岐命  
イワツツノミコト  
伊耶那岐命  
イワサクノミコト  
磐別命  
イワサクノカミ  
経津主命  
フナズシノミコト  
大山祇命  
オホヤマツミノミコト

磐筒之男の子  
伊耶那岐命の子

〃  
岩石の神  
軍の神  
山の神

入岡神社

神谷

火産靈命  
大山祇命  
須佐之男命  
榊稲田姫命

高御産巢日神の子  
神産巢日神の子

知恵の神  
食物の神

八意思兼命  
ヤゴコロオモイカネノミコト  
御倉都命  
ミクラノミコト  
木花咲那姬命  
キハナサキナヒメノミコト  
伊耶那岐命  
イワサクノミコト  
伊耶那美命  
イワサクノミコト

国土を造られた神  
〃  
防火の神

火産靈命  
大山祇命  
須佐之男命  
榊稲田姫命

火の神  
山の神

須佐之男命の配偶者

八幡神社

野々上

舎人親王トネリシノウ

天武天皇第五皇子

日本書記の著者

應神天皇

蒼稻魂神タケミカヅチノミコト

武甕槌命タケミカヅチノミコト

伊耶那岐命の子  
大国主命の子

農業の神  
軍の神

伊耶那岐命

菅原道眞

学問の神

八幡神社

岸田

天照大神

應神天皇

八意思兼命オホヒルメノミコト

大日靈命オホヒルメノミコト

加具土命

高御産巢神の子

天照大神の別名

伊耶那岐命の子

軍の神  
智慧の神

火の神

石作神社

須賀沢宮の下

須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

嚙築神社ヒナリキ

須賀沢字古町

大己貴神

大国主命の別名

医薬の神 温泉の神

矢原神社

矢原宮の下

武速須佐之男命

奇稻田毘賣命

御倉都命

大年神

若年神

伊耶那岐命の子

須佐之男命の妃

神産巢日神の子

須佐之男命の子

羽山戸神の子

病氣全快の神

農業の神

農業の神

農業の神

中山神社

三谷字中山

武速須佐之男命

火産靈神

大山祇命

伊耶那岐命の子

伊耶那岐命の子

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

火の神

山の神

葛沢村

岡神社

三谷字垣内

武速須佐之男命  
大山祇命

伊耶那岐命の子  
伊耶那岐命の子

病氣全快の神  
山の神

物代主神社

下牧谷宮の下

大物主神  
事代主神

大国主命の別名  
大国主命の子

学問の神

菅原道眞  
魚津比古命  
魚津比賣命

武速神社

宇野字池田

伊耶那岐命  
須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

巖石神社

戸敷

大己貴命  
火産靈命  
若年神  
菅原道眞

大国主命の別名  
伊耶那岐命の子  
羽山戸神の子

火の神  
農業の神  
学問の神

片岡神社

片山字山根

武速須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

住吉神社

上牧谷字有谷

上筒男命  
中筒男命  
底筒男命

伊耶那岐命の子  
〃  
〃

海の神 港の神  
〃  
〃  
〃

須佐之男命  
磐筒之男命

伊耶那岐命の子

岩石の神

岩渕神社

生谷西川端

大己貴命

大国主命の別名

医薬の神 温泉の神

大山祇命

位尾神社

小茅野上山

須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

須賀神社

大谷字大砂

須佐之男命  
受持神

伊耶那岐命の子  
保食神うけもちのかみのこと

病氣全快の神  
食物の神

吾勝神社

東下野河向

天津彦火々出見命  
アマツヒコホホデミノミコト  
受持神

邇邇之命の子  
保食の神

食物の神  
病氣全快の神

熊野神社

上ノ字五位垣内

伊耶那岐命  
火具土命  
武甕槌命

伊耶那岐命の子  
大国主命の子孫

火の神  
軍の神

岩上神社

上ノ岩上谷

須佐之男命  
稲田姫命  
大己貴命

伊耶那岐命の子  
須佐之男命の妃  
須佐之男命の子孫

病氣全快の神  
医薬の神  
温泉の神

桓武伊和神社

桓武天皇  
伊耶那岐命

須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

神野村

野口神社

五十波字雄棲山

天照大神  
應神天皇

学問の神

八意思兼命  
トヨイワマドノミコト  
豊磐間戸命  
櫛磐間戸命

高御産巢日神の子  
高御産巢日神の子  
高御産巢日神の子

智恵の神様

猿田彦神

国ツ神

道を導く神 稻荷祭の祭神

与位神社

与位字清水

須佐之男命  
稲田姫命

伊耶那岐命の子  
須佐之男命の妃

病氣全快の神

武太神社

三津字北山

武速須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

天満宮

五十波字塚林

菅原道真  
御年神

大年神の子  
羽山戸命の子

学問の神

若年神

伊耶那岐命の子

農業の神

須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

大山祇神  
迦具土神

伊耶那岐命の子  
伊耶那岐命の子

山の神  
火の神

国司神社

与位字北山

大国主命  
大山祇神

須佐之男命の子孫  
伊耶那岐命の子  
伊耶那岐命の子

医薬の神 温泉の神  
山の神

岩山神社

梯字釜屋

須佐之男命  
経津主命

伊耶那岐命の子  
石筒男命の子

病氣全快の神  
軍神

山神社

杉ヶ瀬字河原

大山祇命  
天照大神

伊耶那岐命の子

山の神

山神社

木ノ谷

大山祇命

伊耶那岐命の子

山の神

菅野村

大社神社

田井字宮ノ谷

火迦具土命

伊耶那岐命の子

火の神

吾勝社

青木字才ノ谷

須佐之男命

病氣全快の神

大己貴命

大国主命の別名

医薬の神 温泉の神

経津主命

石筒男命の子

軍の神

武甕槌命

大国主命の子孫

軍の神

別雷神

神産巢日神の子

雷の神

武内宿弥

若西神社

青木字勝地

建速須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

埴安毘賣命

伊耶那岐命の子

土の神 肥料の神

大名持命

大国主命の別名

医薬の神 温泉の神

大山祇命

伊耶那岐命の子

山の神

事代主命

大国主命の子

八幡神社

奥小屋西谷口

應神天皇

明神社

奥小屋字宮山

稻耨魂命

伊耶那岐命の子

農業の神

諏訪神社

高下字蔵下

建御方刀美命

大国主命の子

軍の神 病氣全快の神

建速神社

木谷字政所

天御中主命

伊耶那岐命の子

天地根源の神

少彦名命

神産巢日命の子

病氣全快の神

武速須佐之男命

伊耶那岐命の子

病氣全快の神

大年神

須佐之男命の子

農業の神

御歳神  
若年神  
大年神の子  
羽山戸神の子  
農業の神  
農業の神

長尾神社  
市場字森ノ下

彦番々出見命  
須佐之男命  
邇邇藝命の子  
伊耶那岐命の子  
病氣全快の神

土萬村

松尾神社

塩山字宮段

大山咋命  
須佐之男命  
經津主命  
伊耶那岐命の子  
伊耶那岐命の子  
酒の神  
病氣全快の神

松尾神社

土萬字宮ノ上

須佐之男命  
少彦名命  
大己貴命  
伊耶那岐命の子  
神産巢靈神の子  
病氣全快の神  
医薬の神

大山咋命  
磐筒男命  
經津主命  
罔象女命  
須佐之男命の子  
伊耶那岐命の子  
磐筒男之命の子  
伊耶那岐命の子  
山里的神  
岩石の神  
軍の神  
水の神

五社神社

大沢字段

天照大神  
天忍穗耳命  
須佐之男命  
大山祇命  
伊耶那岐命  
天照大神の子  
伊耶那岐命の子  
伊耶那岐命の子  
病氣全快の神  
山の神

彦火々出見命  
邇邇藝命  
鵜葺草葺不合命  
邇邇藝命の子  
天忍穗耳命の子  
彦炎出見命の子

◎参考資料

六粟郡誌 諸祭神名総覧 (佐藤三郎氏著)

古事記 日本書記 古語拾遺

# 江戸時代の宍粟郡梵鐘集成 (一)

— 播磨国金屋村鑄物師

長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛を中心にして —

片山昭悟

## 一、はじめに

播磨国宍粟郡金屋村鑄物師長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛は、野里鑄物師芥田五郎衛門とともに江戸時代に活躍した播磨国鑄物師として知られる。

江戸時代の宍粟郡の梵鐘については、金屋村鑄物師長谷川氏を中心に、『山崎郷土会報』82号に山崎町梵鐘集成、83号に一宮町の梵鐘、84号に波賀町・千種町の梵鐘、85号に安富町の梵鐘、86号に南光町の梵鐘を中心にして、90号に長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛製作による梵鐘・半鐘集成について概略を紹介しているが、今回、そのまとめとして宍粟郡の梵鐘、喚鐘（半鐘）について年代順で紹介をする。

宍粟郡金屋村鑄物師長谷川孫兵衛の名を全国の鑄物師に知らせたのは、寛政五年（一七九三）の宍粟郡岸田村（現宍粟郡一宮町上岸田）佛心寺における京都三条釜座和田吉兵衛との争論である。また、地元の言い伝えによると、京都智恩院の大鐘を作ったとされることや金谷の西方に位置する譲り尾にあった鐘撞き堂の半鐘は、長谷川氏の鐘とされることなど興味深い話が知られる。

宍粟郡の梵鐘は、長谷川氏の他に京都三条釜座和田信濃の鐘、大阪の岸本七右衛門の鐘、菅原安欲の鐘、姫路京口住小野太郎大夫の鐘、上郡高田住の中村氏の鐘などもみられる。今回、江戸時代の宍粟郡の梵鐘を考える上で貴重な資料であることからその概要を紹介する。

なお、鐘銘文の詳細については、機会があれば向後に発表したと思うている。

## 二、江戸時代の宍粟郡梵鐘集成

江戸時代の宍粟郡におけるもつとも古い梵鐘は、梵鐘の記録としては、『兵庫県神社誌』にみえる山崎八幡神社鐘である。

「寛永十二年（一六三五）初鑄

延宝四年（一六六七）三月十三日改鑄

治工 長谷川孫兵衛尉藤原吉正

貞享四年（一六八七）九月二十四日重鑄

治工 長谷川五郎兵衛尉藤原家継

同 孫兵衛尉藤原吉継

同 長谷川孫兵衛尉藤原吉次

江戸時代の金屋村鑄物師長谷川孫兵衛・五郎兵衛によるものとしてはもつとも古い記録である。



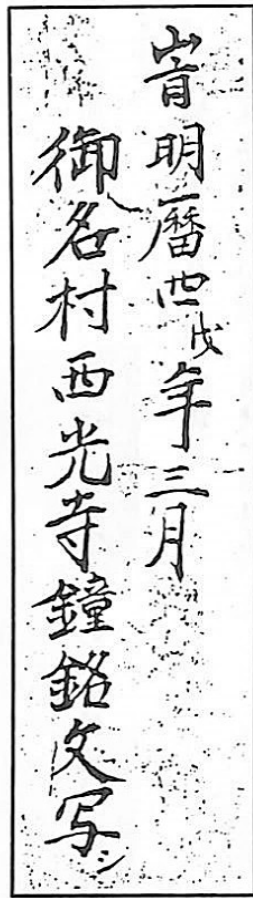
つぎに千種町千草西蓮寺の旧梵鐘は、「西蓮寺鐘銘並序写」によると

慶安四年（一六五二）であり、

延宝五年（一六七七）とされる。

千種鉄で知られる千草屋源右衛門が寄進したとされる鐘である。

山崎町御名西光寺の梵鐘は、江戸時代に調査された「宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写シ」の「御名村西光寺鐘銘写シ」によると、明暦四年（一七二二）とされる。西光寺の寺暦は、開山円空、応永十四年（一四〇七）寂、赤松貞範の子である則親の義弟で、撰津尼崎に天台宗西光寺を興す。のち本願寺五世綽如上人、明徳四年（一三九三）寂弟子となり、浄土真宗に、長水城主宇野氏に愛護されて撰州山西光寺となる。



一宮町須行名、名畑観音堂の梵鐘は、鐘銘から新田義貞の発願による梵鐘とされる。

万治三年（一六六〇） 鑄直

寛文六年（一六六六） 鑄直

貞享二年（一六八五）再鑄

「治工 播州姫路京口之住 小野市兵衛尉藤原家信」

現存する梵鐘は、江戸時代の貞享二年（一六八五）再鑄である。

姫路京口住の鑄物師は大雲寺の梵鐘や明源寺の喚鐘の小野六太夫が知られる。

六、次に安井俊二氏の『梵鐘鐘銘集』によると、山崎町上寺の妙勝寺梵鐘は、明治十三年（一八八〇）の梵鐘鐘銘から天和（一六一一―一六八九）の鐘であったことがわかる。

この鐘は安政の大砲に供出されているもので、『山崎町史』によると、山崎町岸田の明宝寺鐘も供出されている。安政元年（一八五四）にペリーが浦賀に入港しているところである。

#### ◇元禄のころ

波賀町日見谷の赤山観音堂には、元禄五年（一六九二）の鰐口がみえる。

「日見谷村赤山観音

元禄五年九月吉日」とある。治工名はみられない。

宍粟郡の名が刻まれる佐用郡南光町漆野、光福寺喚鐘は、

「宍粟郡漆野村

光福寺浅貞

略

元禄六（一六九三） 癸酉年

十一月十六日

治工 大坂住岸本七右衛門

吉久 とある。

岸本氏は坪井良平氏の『梵鐘と古文化』一九四七年によると、大坂の鋳物師であるとされる。

山崎町上寺、大雲寺の梵鐘は、安井俊二氏の『梵鐘鐘銘集』によると、

元禄七年（一六九四）初鋳

享保五年（一七二〇）再鋳とされる。

治工は姫路京口住 小野六太夫である。

元禄十年（一六九七）には、一宮町福知、大徳寺の喚鐘がみられる。

「元禄十丁丑年七月自恣日

治工三条釜座

和田信濃掾國次」で、

「播州完栗郡三方庄

福智村法雲山大徳寺」とある。

三条釜座和田信濃の作には宝暦十二年（一七六二）の山崎町春安、願行寺鐘（現存）、宝暦十四年（一七六四）鋳直の波賀町齊木、安養寺鐘が知られる。

山崎町中野の極楽寺喚鐘は、

「元禄十年（一六九七）七月二三日

出羽大掾室町宗味作」である。

一宮町福知大徳寺の喚鐘が同じ元禄十年（一六九七）であり、

治工三条釜座和田信濃掾國次でなしに出羽大掾室町宗味である。

宗味は京室町の鋳物師であり、千種町西蓮寺の享保二十年（一七三五）の双盤にみえる。なお、梵鐘によると宝暦三年（一七五二）であったことがわかる。

◇宝永のころ

一宮町森添の御形神社の梵鐘は、「完栗郡内寺社ノ鐘々銘写し」によると、

播州完栗郡味方多加美大明神

略

寶永元（一七〇四）歳在甲申十一月令旦

治工 義貞耳孫住金谷

長谷川孫兵衛

廣瀬郷 金谷村 長谷川孫兵衛藤原吉久

「完栗郡内寺社ノ鐘々銘写し」に「治工 義貞耳孫住金谷

長谷川孫兵衛」とある。

平成六年に一宮町西安積岡田姓太郎氏より御形神社鐘銘写しの資料をご提供頂いた。

これによると右記の資料と異なるようである。

「治工 廣瀬郷金屋村長谷川孫兵衛吉久」

「寶永元 歳在甲申冬十一月令旦」となり

「義貞耳孫住金谷」は見当たらない。

つぎに山崎町山崎青蓮寺は、姫路城主池田輝政の妻花光院が母蓮葉院日淨尼の菩提所として元和四年（一六一八）に姫路城の東にあつたものを移建されたもの。

喚鐘は寶永三年（一七〇六）で現存するが、治工は見当たらない。

寛延二年十月の播磨国細見図には、

「佛閣 寺領

静明山青蓮寺 同百石存完粟郡山崎」とあり、播磨に

おいて重要な寺院であつたのだろう。



山崎町山崎光泉寺の喚鐘は「光泉寺供出記録」によると、「宝永四（一七〇七）丁亥歳九月二十一日造之」とある。「宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写し」によると、梵鐘は享保十五年（一七三〇）とされる。

宝永五年（一七〇八）には揖西郡時重村の西勝寺鐘を、宍粟郡金屋長谷川孫兵衛藤原吉房が鋳ている。

#### ◇正徳のころ

波賀町安賀 満願寺の梵鐘は、現在の梵鐘から

正徳二（一七二二）壬辰年三月

姫路京口之住 小野太郎左衛門尉藤原正家 である。宍粟郡における姫路京口住小野氏によるものは、貞享二年（一六八五）再鋳の一宮町須行名名畑観音堂鐘が小野市兵衛尉藤原家信である。

また、山崎町大雲寺の梵鐘は享保五年（一七二〇）、明願寺喚鐘は享保六年（一七二二）の小野六太夫である。宍粟郡には、姫路京口住小野氏のもがこのころ多く見られる。

山崎町御名西光寺の喚鐘は、現鐘銘によると正徳二年（一七一）とされる。

また、山崎町寺町の興国寺鐘は、安井俊二氏の「鐘銘集」によると、正徳二年（一七一）であり、三条釜座和田信濃國次によるものである。三条釜座は、大阪府堺市光田家蔵文書によると、当時鋳物師を統率している真継家より、正徳五年（一七一五）に離

れていくことになる。

安富町栃原の正源寺に現存する明治三十六年（一九〇三）八月鑄替の喚鐘銘によると、旧喚鐘は、正徳四年（一七一四）の鐘である。

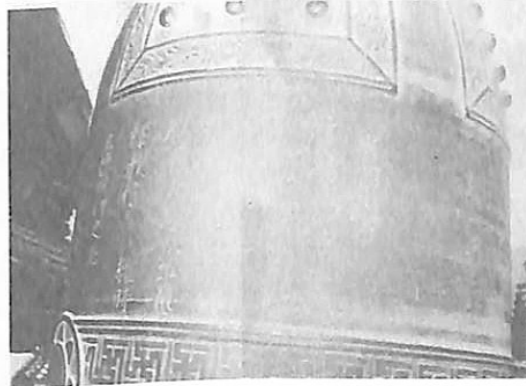
山崎町五十波の本願寺喚鐘も正源寺の喚鐘と同じ年の正徳四年（一七一四）十一月作で、撞座や下帯、乳郭がめずらしいタイプで現存する鐘であるが、治工は見当らない。このタイプの鐘は宍粟郡では初出である。いかと思われる。

◇享保のころ

山崎町元山崎の明源寺喚鐘は享保六年（一七二二）の治工小野六太夫である。

小野六太夫は姫路京口住の鑄物師として知られる。このほかにも小野七左衛門がみえる。

明源寺は金谷の譲り尾にあった中世の古代寺院の長谷山遊鶴寺と関り



京都の鑄物師の系列ではな



わりのある寺院で、天正八年（一五八〇）羽柴秀吉に焼失させられたとの言い伝えがある。

安富町名坂の今念寺喚鐘は、享保九年（一七二四）で鐘銘には

「干時享保第九甲辰年二月吉良日

「播陽完粟郡安志庄名坂村」と刻むが治工名は見当らない。

「干時」と「播陽完粟郡」とあり、長谷川氏の鐘とはやや異なるようである。

山崎町中野徳王寺の梵鐘は、享保九年（一七二四）長谷川孫

兵衛藤原吉信

長谷川五郎兵衛家継 と共同でつくっている。

波賀町安賀 安賀八幡神社の鐘は、享保十一年（一七二六）であったことが「宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写し」によりわかる。

「治工同國同郡 広瀬郷金屋村

長谷川孫兵衛藤原吉信

尙時 享保十一丙午三月十六日」

このように長谷川孫兵衛の鐘の中で、広瀬郷金屋村と陰刻するのは、寶永元年（一七〇四）の一宮町御形神社鐘にもみられる。

山崎町山崎の光泉寺の梵鐘は、

「宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写し」によると、

享保十五年（一七三〇）である。

山崎町高下の法傳寺喚鐘は、享保十七年（一七三二）初鑄、弘化四年（一八四七）二鑄 文久元年（一八六一）三鑄である。この鐘は現存している。

享保十一年（一七二六）の安賀八幡神社鐘が、長谷川孫兵衛であり、六年後にあたる享保十七年（一七三二）初鑄は、長谷川氏のものではないかとも思われる。

なお、鐘銘から文久元年の三鑄は、長谷川孫兵衛藤原吉則後見西新町住人 大工長谷川藤蔵藤原安章、下職丹州福知山住釜屋源兵衛である。釜屋源兵衛は、京三条釜座の系列である。

『山崎町史』「明宝寺鐘鑄記録」によると、享保十七年（一七三二）長谷川五郎兵衛とある。このころの長谷川五郎兵衛は長谷川孫兵衛と共同で製作しているものはみられるが、一人の鐘としては数少ない資料である。次に千種町西蓮寺の双盤は、享保二十年（一七三五）京室町住出羽大掾宗味作である。

## 長水城略史

深川 定義

### 一、長水山の地理

山崎町のほぼ中央部、五十波、宇野、片山、上牧谷にまたがる長水山は、標高五八四・八m。山頂の位置は北緯三五度一分、東

経一三四度三分である。登山口の標高は宇野側約一三六m、五十波側約一二六mである。山頂の展望よく、瀬戸内海から美作の連山迄望むことが出来る。

### 二、前期の長水城

この山頂に村上天皇の裔赤松則村（円心）の子則祐すくゆうが築城したのは、一三五二年頃（正平七・文和一）と伝えられる。当時は南北朝時代、足利尊氏が弟直義を殺し、南朝が一時京都を奪回したのがこの年である。

初代城主は則祐の兄範資のりあきの四男、広瀬遠江守師頼、時に二十二歳であつたと言う。それ

より二代頼康（清康）三代則親、四代満親、五代親茂と続いたが一四四一年（嘉吉一）六月二十四日、則祐の孫赤松満祐が將軍義教を殺した時の嘉吉の乱に山名持豊の軍に攻撃され親茂は城を棄てて逃げたらしい。（尚將軍を斬ったのは宍粟の武士安積監物行秀であるという。又一宮岡城には師頼の長兄の曾孫赤松元

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします



# 神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68

(神姫バス山崎待合所内)

TEL (0790) 62-7588

FAX (0790) 62-7589

久が居たが八月に落城という)

### 三、長水城の再興

赤松満祐、安積行秀らは、嘉吉元年九月十日新宮町城山城きのやまに於て討死、播磨は山名氏の支配下となった。時は流れて一四六七年(応仁一) 将軍の後継争いに端を発し、細川、山名両氏が諸大名を引入れ争った応仁の乱に際し、満祐の弟の孫赤松政則は細川方に属して戦い播磨を奪回、一四六九年(文明一) 諸城を修築、長水城は村上源氏の一族、宇野満利が城主となり、以後一五八〇年(天正八)迄、祐秀、祐利、村頼、政頼、祐清と六代百十三年城は存続した。尚、宇野氏の

の城主の名や代数は(四代とも言う) 異説がある。又山名支配下の長水城にも留守番が居た可能性はある。

### 四、篠の丸城

山崎町には長水城の他、主要な城に篠の丸城があった。山崎町横須南西の三三八mの山上である。この城は元弘年間村上源氏の一族釜内範春が砦を構え、後更に一二四六年

心のゆとりのおてつだい

**安井書店**

**YASUI BOOKS**

本店  
山崎町さつき通り

TEL (0790) 62-0700  
FAX (0790) 62-2117

ブックランド店  
山崎町中井

TEL (0790) 64-2051  
FAX (0790) 64-2052

頃(正平一、貞和二) 則祐の兄、赤松貞範が築城し、貞範の子頭範が城主となったが、頭範は飾東郡(現姫路市) 庄山城に移り、長水城主広瀬師頼の弟師範が入り、則康、満範と続き、満範は嘉吉の乱の際、城山城で討死、後赤松氏の再興によって満範の子祐則が城主となり、続いて孫則国が相続し、一五四一年(天文十

### 五、戦国の播磨

一) 則国は、八十三歳で死去、更に年を経て、長水城主宇野政頼の長子満景(光景) が城主となった。(異説あり)

一四九六年(明応五) 赤松政則が四十二歳で急死し、養子義村(赤松範資の裔、政資の子) が赤松本家を継いだ。戦国時代の播磨は北から山名氏、西から浦上、尼子氏が侵攻し、特に一五三八年(天文七) には尼子詮久あきが侵入し、赤松晴政はこれと戦い、淡路へ逃げたが、長水城主宇野村頼らは争わなかった。やがて詮久は山崎鹿沢に砦を残し、毛利氏と戦うため兵を返す。かくて赤松氏は衰退、宇野氏は隆盛、一五六三年(永祿五) 政頼が城主となった頃の長水城は穴栗掛保、但馬の一部まで勢力化下に治めたという。

### 六、秀吉中国攻め

一五七六年(天正四) 七月、織田信長は羽柴秀吉に命じて中国平定にとりかかった。播磨では置塩城(夢前町) の赤松則房、三木の別所長治、御着の小寺政職、姫路の黒田孝高よしたからは備前天神山の浦上宗景らと共に秀吉に従い、又上月町の赤松政範、竜野の赤松広英、長水城の宇野政頼、英賀城三木通秋らは備前岡山の宇喜

多直家らと共に毛利輝元に通じていた。天正五年十月秀吉は黒田孝高に迎えられて姫路に入り、播磨但馬の攻略に着手、十一月但馬竹田城、八木城を落し、十二月には佐用郡福原城上月城を破り、竜野の赤松広英は降伏した。

しかし、翌天正六年二月三木の別所長治が秀吉に叛し、四月には毛利軍の軍勢が吉川元春を將として上月城を落した。更に伊丹の荒木村重や御着の小寺政職も秀吉に反抗し、黒田孝高は荒木に捕えられた。天正七年三月宇喜多直家が毛利に叛いて毛利軍は播磨を撤退、九月には荒木が城を脱出、天正八年一月には三木城が落ち、閏三月石山本願寺が信長と和した顕如門主が紀州へ去り、英賀城と長水城が秀吉の攻撃目標となるに至った。

### 七、宇野氏の内訌

長水城主政頼には七人の男子があり（内一人は早逝）、長男満景は先妻お忠の方の子、次男祐清以下は後妻お時の方の子であった。女子も四、五人あったという。（異説あり）祐清は政頼の三男美作竹山城の新免伊賀守宗貫と共に毛利を支持し、長男満景はや、織田側に傾いていた。四男宗祐は林田松山城の本郷祐義の養子、五男祐光（政友？）は垣屋城主恒屋（恒谷）光成の養子、六男は若くして死んだ（討死？）という。尚政頼の長女は名も生年月日も不詳だが、室町幕府最後の將軍足利足利義昭の妻だったとの説がある。長男満景は継母にいじめられ、幼時から政頼の弟清野城主祐久に育てられた。政頼、満景の関係は次第に疎遠となり、満景は妻帯後横須篠の丸城主となった。

秀吉の謀略もあったかも知れぬが父子の対立は益々深刻化し、天正七年六月政頼の従弟祐政と内海左兵衛が兵を率いて篠の丸城を攻め、満景の妻は矢に当たって倒れ、満景は自害した。（異説あり）

### 八、秀吉軍長水攻め

一五八〇年（天正八）閏三月秀吉の使者が長水城を訪れ、降伏を奨めた。城方では即答せず、評定の上敵対しない旨隠居政頼が返答に赴く事に決し、政頼は姫路へ出向いたが、秀吉は長時間待たせて会わず、政頼は怒って城へ帰った。（異説あり）

秀吉は四月英賀城を完全に包囲し、又長水へも兵を向わせた。秀吉方の主な將は、摂津三田の人荒木平太夫重賢、尾張の神子田半左エ門正治、蜂須賀小六正勝らで、黒田官兵衛孝高は参加、不參加の二説がある。置塩城の赤松則房も加わっている。寄手は林田、新宮の二方面から北上、林田松山城の本郷宗祐は降伏、長水城主祐清は安志狭戸

きれいなカラープリントの店



Specialty Camera Shop  
**コーポカメラ**

本店 宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089  
フリーダイヤル ☎0120-440-990  
FAX0790-62-7429  
咲ランド店 TEL0790-63-0533

で善戦したが、寄手は夜間狭戸から峠を超えて宇原へ転進した。新宮側では政頼の弟政祐、五男祐光、香山城の香山秀明らが防戦していたが、寄手に狭戸から転じた部隊が加った為、退いて長水城へ入った。

秀吉は河東愛宕山に本陣を置き、四月下旬清野の構を攻略、更に岡城（一宮町）を攻め、岡城は城兵の殆どが討死した。内海左瓶衛が守っていた篠の丸城もこの頃落ち、敗戦の兵は長水へ撤退した。寄手、城方とも兵力には諸説あり、正確な人数は何とも言えない。

### 九、孤城落つ

四月下旬には英賀城も落ち、（城主は海路逃走）五月には秀吉軍は長水攻めに集中する。安積将監らは宍粟の武士ながら、赤松則房の陣中であつて長水攻めに加つていたが、彼は長水城内の満景同情者らに内通を奨めていた。満景の妻の親族ら内通者約二十名（異説あり）は、五月九日夜寄手に呼応して城に放火

おくすりの相談と処方せん受付

# ごこう薬局

薬 剤 師 岸 本 八重子  
薬 剤 師 岸 本 弘 子

山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

した。

則祐の築城後二二九年、文明年間の再興後一一二年の歴史ある城はこゝに姿を消した。（城の略歴は前期一三五二〜一四四一年、空白期一四四一〜一四六九、後期一四六九〜一五八〇）政頼、祐清らは、美作大原の新免宗貫を頼ろうと都多谷を北上千草まで逃れたが秀吉軍に攻撃され、又増水の為千種川を渡れず、千草大森に於て自害した。政頼の末子は当時三歳だったが乳母と家臣に伴われて船越山に逃れた。瑠璃寺中興の高僧真賢法印はその後身という。又祐清の子に当時五歳の太郎というのがあり、これも家臣某が連れて逃げようとしたが、強力の野伏に襲われて負傷したので某は涙をのんで太郎を殺し、自らも切腹して果てたと伝えられる。さて真賢は政頼の他の子女に比べて年令差が大きいので、或は祐清の子だったかもしれない？政頼の妻は但馬へ逃れ、娘三人の内二人は殺害され一人は生存したという。荒木、神子田、新免宗貫、赤松則房、安積将監らの後日の物語はこれを略する。

### 十、長水山信徳寺

時は流れて三百五十余年、長水の重臣、石丸氏の裔渡辺日妙尼は老廃した城跡に長水攻防の戦に斃れたすべての人々の慰霊の為、日蓮宗の道場建立を発願し、地元の協賛と多くの人々の浄財を得て、昭和九年（一九三四）十一月二十三日一字の堂が建立され、長水山信徳寺と号し、昭和四十六年（一九七一）本堂が改築された。



### 後記

昭和六十年五月、長水山信徳寺編「長水城略史」を改訂、一部加筆又は削除したものである。

### 参考資料

山崎町史、一宮町史、長水軍記、六粟郡誌、宇田義雄六粟郡古城跡、宇田義雄篠の丸軍記、遠藤島生悲運長水城、高坂好、中世播磨と赤松氏、津山市横山家文書写 等

## 歴史の足跡吉野を訪ねて

研修部 垣口 正信

春の研修旅行は、山岳信仰修験の霊場吉野山で、昔から歴史の舞台となってきた地です。また、桜の名所としても名高く、その吉野山の史跡を訪ねるのが今回の目的である。

五月二十四日、参加者六十四名バス二台で午前七時三十分山崎を出発する。

今年地球温暖化による異常気象で不順な天候が多く、今日も近畿地方は降水確率七十パーセントとテレビは報じていた。集合したとき、早くも小雨がぱらぱらと降り出したが、中国自動車道を走る頃には雨もあがり、途中赤松PA、西名阪自動車道香芝SAにて休憩をとり、一般国道を経て予定時刻よりも早く吉野山に午前十一時に到着した。

当初計画に入っていなかった吉野神宮は、下見のとき時間があればお詣りすることにしていたので、先ず吉野神宮に参詣する。緑に包まれた広大な神域、大鳥居をくぐり正面に玉砂利の敷き詰められた広い境内の中に、森嚴なたたずまいを見せている。ここは、足利尊氏討伐に失敗して悲劇的な生涯を終えられた後醍醐天皇が祀られているお宮で、明治二十二年に創建されたが、今の社殿は昭和七年に改築したものである。

総檜造りの見事な建物で、本殿は正北面を向き、つまり京都に向かって建てられている。また、入母屋造りの拝殿などもすべて総檜造りである。拝殿の右に摂社が一区画を構えて建ち、いずれも、後醍醐天皇が建武の中興に功績のあった日野資朝、児島高德など七人の功臣が祀られている。お宮は、花のない人影のまばらな季節のせいか、何故かひしひしといひしれぬ寂しさが身にせまるようであった。

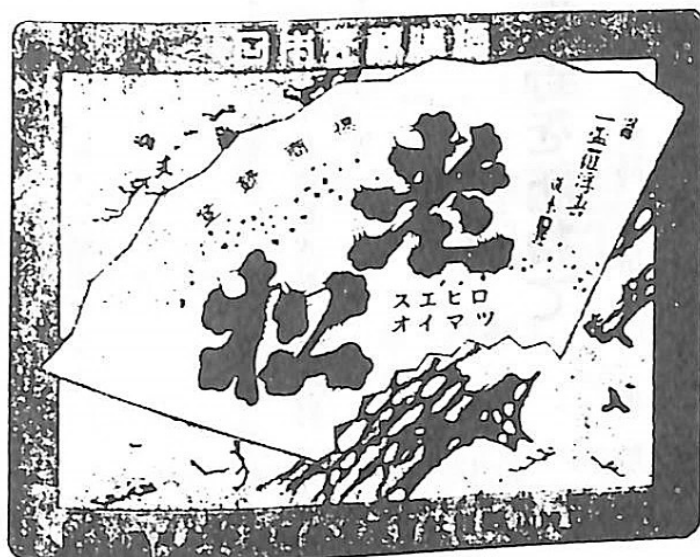
吉野神宮を後にして、少し登ると広い下千本駐



車場に出る。ここから先は、大型車は入れないので、全員下車し、食事処千本楼まで歩く。少し行くと、道の右側足もとに「よし野にて桜見せうぞ松木笠」と芭蕉の句碑があり、左側は昭憲皇太后が吉野山に行啓の折、ここでしばらくお立ちになり絶景を賞されたところ、桜の時期は見渡す限り花また花であるが、今回は新緑の候で、若葉におおわれその絶景を見ることはできないが、花なき後の新緑の美しさもまた格別である。先へ進むと、吉野三橋の一つで「一の橋」という朱塗りの大橋があり、それを渡るとこの辺りから少し民家や茶店などが並ぶ。ロープウエイ山上駅前の食事処に着く。昼食は三十

分程ですまし、十二時から金峰山寺（蔵王堂）吉水神社へと向かう。

少し小雨が降ってきたがさしたることはなく、狭い道路には自動車の通行も多く、交通事故には注意をはらいながら、やや急坂の道を登って行く。と黒門がある。昔は大名でも槍を伏せ馬から下りて通ったという吉野山の関所で、門を入ると道の



両側に旅館や土産物店が軒を連ねる。坂を登りつめると、銅の鳥居（重要文化財）が、見上げる石段の上からどっしりとした姿勢で、私達を迎えて立つ。この鳥居は、安芸の宮島、大阪四天王寺とならんで日本三大鳥居の一つといわれている。高さ約八メートル、柱の周りが約三メートルで、銅製の鳥居としては日本最古のものです。鳥居の正面頭上に掲げられている扁額の発心門という字は、弘法大師の筆であると伝えられている。

銅の鳥居から二百メートル余り先の城門を思わせるような石垣の上に、国宝金峰山寺の仁王門がそびえ立つ。三間一戸、重層入母屋造り、本瓦葺の楼門

は、右に「阿形」左に「吽形」の金剛力士を配して北に面し、南へ続く大峯、熊野への入り口の門にふさわしい存在感を示している。「あ、うんの呼吸」とは、これからきたもの。

仁王門をくぐり参道を上がると、正面に大きな蔵王堂が見える。蔵王堂は、金峰山寺の本堂で修験道の根本道場として、

茶 喫

**秋 桜**

山崎町役場西隣

宍粟郡山崎町鹿沢79-21(コスモハイツ)

TEL (0790) 63-3707

七世紀末に役行者が創建したがその後焼失し、現在の建物は天正二十年（一五九二）に再建されたもので、高さ三十四メートルの木造建築では東大寺の大仏殿に次ぐ大きさといわれる。堂内には蔵王権現像を本尊として安置されており、躍動感あふるるその形相は、悪魔降伏の姿といわれている。私達は内陣も拝観し、数多くの仏像や宝物を拝むことができた。また、本堂を支える六十八本の円柱は、太い物で直径一、二メートルもあり、一本として同じ大きさのものはなく、柱にも梨、神代杉などの貼紙がしてあり、全て異なる種類の自然木が使用されて、中にはつつじの木があるのに驚いた。

蔵王堂を後に少し歩くと、吉水神社に着く。もとはお寺で、小さな中門を入ると、重要文化財吉水神社書院の閑静な建物が目に入る。その右手に小さな神社の本殿がある。後醍醐天皇と、楠正成、吉水院宗信法印が合祀されているが、神社というより吉水院といったほうがこの歴史や由緒にぴったりののではない



コーヒーハウス

# らふ

山崎文化会館西  
☎ 62-8559

かと思われる。

私達は書院を拝観する。案内の宮司さんから、お話を聞く。この書院は日本最古のもので、我が国書院建築の代表的傑作といわれている。主な特徴は、「床の間」男の間といつて主がしつかりしていけば家がすたらない、などと面白く話される。更に、「違棚」「柱」「釘隠」「天井板」「鴨居」など特異な構想や、珍しい手法の建築とのことである。内部は十二の部屋から成り義経と静御前の最後の別れとなった居間や、弁慶男のロマン、後醍醐天皇南朝哀史、豊臣秀吉吉野花見の本陣などにまつわる話を一同興味深く聞いた。ここには、

所蔵の国宝や、重文が約百二十点展覧してあるが、国宝は国民のものであるから写真は遠慮なく自由に撮ってくださいと、大変ユニークな宮司さんであった。

拝観を終え、団体行動はここまでとして、各人自由行動にて午後三時に、下千本駐車場に集合することとする。皆それぞれに、もときた道を商店街

創業明治28年・さつき本舗

# 四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の  
真心こめた手づくりの御菓子を

 御菓子司 

本店・播州山崎町さつき通り (電) 62-0170  
山田店・播州山崎町山田 (電) 62-0160

に散って行く。私は、土産物に柿の葉すし、吉野葛を買う。中には、陀羅尼助を買われた方もあった。

山崎への帰路は、途中国道がやや渋滞したものの、午後六時五十分頃全員無事に帰着した。また、心配した雨にもあまり降られないことなく、旅行することができ幸であった。

―むすび― 吉野の歴史は、華やかさと悲しさが千数百年の人間ドラマを織りなしてきた地である。私達が、この度訪れた古寺、史跡、文学の足跡はごく一部であり、すべてを観ることはできなかったがまたの機会にゆずることとする。

なお、今回の旅行にあたっては、山崎町老人大学歴史探訪部の方々に、格別のご協力を賜ったことを深く感謝し、お礼を申し上げます。

## 事務局だより

\*「しそうの文化財」の冊子発刊について

この程、宍粟郡文化協会連絡協議会より郡内各町の国・県指定文化財やその他主だった史跡等を紹介した冊子が発刊されました。

入手ご希望の方は、宍粟郡各町教育委員会内文化協会事務局にお申込下さい。一冊一、五〇〇円で頒布しています。

\*去る五月二十九日、郷土研究会の神野地区支部長としてご尽力下さいました上野一人様がご病気のため亡くなりました。謹んでお悔やみ申し上げます。

\*上野一人様の後任として神野地区支部長に  
春名俊夫様  
をお願い致しました。